

## 特集：センター試験対策

# 私の授業実践～基本にこだわり，数をこなす

木村 達哉

### 1. センター試験にせよ，二次試験にせよ

「センター試験で高得点を取るための授業スキル」  
一これについて僕なりに一生懸命に考えていたのだが，教員になって21年間，センター試験用の授業なんてしたことのない僕がどう書いてもこりゃウソくさくなるなという結論に達し，したがって僕の3年間なり6年間なりの軌跡について書いてみることにした。参考になれば幸いである。

センター試験で高得点を取れば，それだけで合格できる国公立大学が大半である現状では，確かにセンター試験対策は必要なのかもしれないが，しかしセンター試験を徹底的に分析し，傾向を掴むことはできるとしても，そのための対策授業は意味がないのではないかと。たとえばその年度の問題傾向が変われば，その授業は何の意味ももたなくなるわけで，センター試験でも二次試験でもどういう問題が出て対応できる英語力を培うことが重要なのである。つまり，入試のための授業ではなく，英語力をアップさせる，英語そのものの力を上げる授業でないと意味がないのではないかと考えている。

### 2. 徹底的に基本を反復する

多くの先生方が授業見学に来られ，口をそろえておっしゃるのは「基本にかなりこだわっておられますね」ということである。僕は特別な授業はできないし，昔ながらの授業スタイルであるが，英語の基本である，単語力・文法力・読書力に対するこだわりは人一倍強い。単語を知らなければ読めないし，文法的知識があいまいだと，読解にしてもリスニングにしても超テキストな読み方や聞き方しかできない。そうすると英作文やスピーキングにも悪影響が出るのは当然だ。

さらに言えば，低学年の頃から読書指導を国語科の教員と協力しつつ，ちゃんとしておかないと，英語の文章を読んでいるときに，第3段落や第4段落

になるとすでに第1段落の内容を忘れていているという悲惨な事態になりかねない。あれは英語の読解力ではなく，そもそも読書力がないからそうなのであり，したがって全訳を配布しても理解できないということになる。

僕もいろんな失敗を経てきた。教員になった当初には，基本的な単語力さえない生徒たちに「単語は文脈から判断することが大事だ」と語る愚を犯し，基本的な文法力がない生徒にひたすらセンテンスを暗記させる愚を犯しながら21年の歳月を過ごしてきたのだが，ここに来て，灘の生徒という，言うなればアタマノイイ生徒たちに対しても，徹底的に単語と文法の小テストを怠りなく行い，放課後は野球部の練習をしながら，再テストや再々テストのために教室に戻る日々を送っている。

また月に最低1冊の読書を課して，推薦者である僕に「推薦者への手紙」を提出させることにより，読書癖を培っている。もちろん英語の本ではなく，漱石や鴎外という古典から，本校の卒業生である遠藤周作，あるいは中島らもに至るまで，たくさん本を紹介してきた。『奇跡のリンゴ』（石川拓治著，幻冬舎）を推薦したときには生徒たちからの反響が凄く，推薦者（つまり僕）への感謝の手紙が多かったのを覚えている。

単語は『ユメタン』（アルク）の①センター試験レベルと②国公立大2次・難関私立大レベルを徹底して（と言ってもテストメーカーに世話になっているが）行い，出てきたフレーズやセンテンスを，CDを使って英作させる。文法は（これまた同じくテストメーカーの世話になりながら）『NextStage 英文法・語法問題』（桐原書店）や『UPGRADE 英文法・語法問題』（数研出版）などを何度も試験して，4択クイズ形式の文法問題に慣れさせたあとに，『東大英語基礎力マスター Vol.4』（講談社）でそれぞれの文法的知識を使って和訳させ，そのうえで英作

させて、それを暗唱させる。つまり単語集と文法問題集を使って基本的な英作文の力を培いながら、授業ではひたすら読解を行うというスタイルなのである。

### 3. リーディングは数が命！

生徒たちには読解用ノートは1冊しか作らせない。授業でやった長文も自分で買った問題集も1冊のノートにやらせる。ノートの作り方については割愛するが、ノートは40シートのノートを使うとすると(左ページに英語を貼り付け、右ページに解答し、全訳を貼り付ける)、ノートを1冊終えると20長文を解き終えたことになる。このノートを卒業までに何冊作れるかを競争させるのである。ノートはB4ノートではなく、余白部分が多くなるようにA3ノートを強制する。LOOSE-LEAFは厳禁。そうすると生徒たちはこちらが何も言わずともノートの冊数を競ってくれる。卒業時にVol.10の生徒は高2と高3で200長文しか読んでいないことになるが、Vol.40の生徒は800長文読んだことになる。平均すると400~500長文読むことになるのだが、それだけ読めば普通は読解力が上がる。

逆に言えば、200長文しか読んでいない生徒の英語力が低いのは当たり前だし、高2までに単語を覚えるのをさぼり、文法の勉強をさぼった生徒が、読解の数だけこなしても上達しない。単語がわからないまま、緻密な読み方ができないまま、数だけこなすのだから当然であろう。

自分はこれだけ読んだという実績が目に見えるので自信になるし、間違いなく読解力がついてくる。それがセンター試験であれ、東大の大意要約であれ、慶応の超長文であれ、関係ないのである。最近は書店で、本をいかに速く読むかについて書かれた一種の自己啓発本が売れているが、本当に本をたくさん読んでいる人はあの手の本を読まなくても1か月に10冊程度読むのは大して難しいわけではない。あの手の本を買わねばならないのはむしろ、本を読まない人たちなのである。

生徒たちには単語と文法を徹底して覚えさせ、そのうえで多読させるという、言うなれば当たりの指導しか僕にはできない。ビデオを使うわけでもないし、何か特別な教材を使うわけでもない。現在は中学2年生を教えているが、検定教科書の1レッス

ンが終われば単語の試験をし、文法の試験をし、そして全文を暗唱させるという指導である。生徒からは「これ、いつまで続くんですか」と聞かれるが、「キミらの英語力がつくまで」と答えることにしている。中学の検定教科書でも、全文暗唱させていると、こちらが驚くほど英作文の力がついていることがわかる。これを英語Ⅱぐらいまで続ける予定であり、生徒からデビルと呼ばれようと鬼畜と呼ばれようと、こちらが妥協しなければ英語の力はつくと信じている。授業は授業というより漫談なので、居眠りする生徒はほとんどいない。楽しみながら、しかし覚えることは徹底して覚えるというスタイルで高2ぐらいまで進んでいくのである。

### 4. リスニングは1時間ディクテーション

リスニングは、たとえば授業の最初に5分や10分間かせて問題を解かせても効果はほとんどゼロで、やはり自宅学習につなげる授業でないと意味がないと思っている。僕は高2で1時間リスニングの授業をするが、それは『センター試験英語リスニング合格の法則』(アルク)を使い、授業では各DAYのレットライを聞いて問題を解かせた後は、その2題を1時間かけてディクテーションさせる。その上で音とスペリングの関係などを少し講義することもあるが、とにかく彼らは「魔のリスニング授業」と呼ぶほどキツイ授業となる。そのうえで週末の宿題として、各DAYのドリルとエクササイズのディクテーションを課す。これによって週に3日は英語をじっくり聞いて、書き取っていくことになる。センター試験レベルのリスニングならば、これだけやれば十分であろう。

### 5. この先生に教わってよかった

教壇に立っている者であれば誰もが思うことであろうが、やはり生徒たちが卒業するときに「この先生に教わってよかった」と言われたい。だからこそ、基本と数にこだわり、そして授業のクオリティにこだわるのである。冒頭にも書いたが、「〇〇対策」はやったことがない。どこでも通用する英語力を身につけさせたいと考えている。